

茨城県最初の駅「古河駅」120年

ふた昔ほど前になりますが、北陸の山村で、「これ、車ではねちゃったんだけど、どうすつかねえ。食っちゃおうかあ。」と、その家のおばあさんが、米袋から狸ねこのしっぽをつかんで持ち上げたのを見たことがあります。文明開化以前には確かにあったはずの、けものたちの安穩とした暮らし。それが、避けられないほどのスピードを出す機械によって変貌してゆくさまに哀れさを感じたものです。モーターリゼーションは私たちの暮らしのみならず、動物たちの生活環境も変えたのです。

そこでふと、狸と機関車の話を思い出したので。

東北本線(宇都宮線)古河駅が、茨城県最初の駅として開業したのが1885年、今からちょうど120年前のこと。その



明治18年(1885)開業した古河駅

た。すると、ガツタン、ゴットンと音がして何事もなく通り抜けられた。ところが翌日、そこには大きな狸が転がっていたというのです。そういえば、狸は昔から何かに化けて人をだますもの、また、腹鼓はらこぶみをならす怪異の動物と考えられてきました。そんな狸が、大きな音を立てて走る機関車に化けることもあったのでしよう。このような話は古河に限らず、新橋横浜間に鉄道が開通して以来、鉄道が開業した各地で語られています。

それまで狸のようなものに得体の知れない「怪」を感じていた人々が、新しい技術にも「怪」を感じ始める。ビデオテープや携帯電話など、とても半世紀前にはその存在すら想像もできなかった機器が、このところホラーの素材に使われていますが、近代化は怪までも変容させてきたのでしよう。しかもつばら私の心残りに関心は、あの20年前のはねられた狸が車に化けてきたのか聞き忘れたこと。そしてどんな料理にされたかということ。

「枯野原汽車に化けたる狸あり」

夏目漱石

古河歴史博物館学芸員 立石尚之